

# 經濟論叢

第六十二卷 第一・二號

---

古典經濟學に於けるマルサス理論……………岸本誠二郎

標本論の一般化の問題……………青山秀夫

ユスツス・メエゼル(下)……………出口勇藏

貯蓄投資の關係と時間の問題……………岩根達雄

馬場啓之助著「ジョン・S・ミル」……………行澤健三

ハンセンの財政々策をめぐる諸問題……………木下和夫

---

京都大學經濟學會

# 馬場啓之助著

「ジョン・S・ミル」

行澤健三

馬場啓之助氏著「ジョン・S・ミル」の書評に當り、最初は「インナー・アーノルドの」批評家の職分は對象を實際あるがままに描くことにある。」との見解に従ひ、先づ馬場氏が如何にミルを描いたかを見、次いでどれほど忠實にミルが描かれてゐるかを考察しようとしたが、同書はミルについての忠實な要約と見られる故、要約を更に紹介するのは冗漫の氣持を免れないと思ひ、かかる部分はごく概要に止め、馬場氏のボジテイヴな部分と思はれるコントとの關係をやる立ち入つて紹介し、次いでネガテイヴな面として中心點のあいまいさを取り上げ、併せてミル研究に對する若干の感想を述べることとした。「現代經濟學叢書」の性格並びに紙數の制限を考へれば無理な注文と思はれる面もあるが、此の紹介文も單なる消費にあらずして、生産たらしめんとする希望の故に外ならない。

「ジョン・スチュアート・ミルは柔軟な感受性をもつとも鋭敏な獨創力に恵まれた。かかる思想家の生涯と仕事について解説するについては一方に於て出来るだけ廣く時代の動きを考察すると共に、他方に於てかかる動きの中からその獨創的な個

性を生き生きと浮び上らせる用意が必要である。ミルに對する解説は廣くいつて十八世紀と十九世紀思想の交流、より限定的に見れば、經濟學と社會學との交流という思想史上の問題を中心として『問題史的立場』からする」と共に「かかる時代の問題を捉へるに當つて個性的な生き生きとした人柄を捉えねばならぬ。」と馬場氏は序に述べてゐる。かうした二つの觀點からの捉へ方の爲に、此書の採つた敘述様式は傳記的な構成を持つてゐる。

即ち「ミルの仕事は多方面にわたると共にその何れにも専門家として十分通用する業績をあげてゐると共に體系的な關聯を失つてゐない。いはば綜合力と分析力と共に恵まれてゐる。」かかる性格の形成に關して有名な早期教育と豊かな情感を考察し、一個のペンサミストから突如陥つた精神の危機以後の彼の生涯は情感の發達の歴史であるとしスターリング、カーライル、コールリッジ、サン・シモン等の思想の攝取を検討し當時の英國及び大陸の情勢を併せ考察しつゝ「烈しい精進の連續」の歴史をのべて馬場氏がミルの主著とみなす論理學體系及び經濟學原理をやや立入つて紹介してゐる。しかし傳記的な敘述にあつては、ミルの自傳を骨幹として、歴史的な情勢を、その渦中にあつたミルが取り得なかつた鳥瞰的な立場から附け加へてゐる。

「初期の教育と仕事」「精神の危機」「政治評論家としての活



に關する若干の適用」をも併せ論じ「抽象的な思辨の一部門と考へられた經濟學のうちに含まれてゐるよりも遙かに廣い範圍に亙る思想と問題」を取扱ふことが含まれてゐる。だがこの變化を過大視することは、ミルの經濟學說の眞意を見誤る恐れがある。馬場氏は考へる。その理由は、第一に、三〇年代の方法論が四〇年代の論理學にそのまま挿入されてゐること、第二に、論理學體系の發刊の翌年に「未決問題」が出版されてゐることの二つである。かくてこの變化が如何なるものであるかを、馬場氏はコントとの交渉に求めるのである。

コントは特殊社會學を認めず、社會の個別科學分立の意圖の基底は形而上學的精神であるとする。かくて「著明にして公正なる哲學者・アダムスミスはその不滅の著書のうちで別に新しい専門の科學を創設するという野望を持たず、ただ分業・貨幣の基本的職能・銀行の一般的機能等に即した分析的説明と人類の産業的發展についての主要なる解明とによつて社會哲學の種々なる主要問題を論明することのみを念とした。」しかるにスミス以後の經濟學者は經濟學を専門の個別科學として樹立しようとして、かへつて中世のスコラの空論をらしめた、というのがコントの經濟學批判であつた。ミルは此の意見に聞くべきものあるを思つたが、コントと異り此の解決を社會形態論に求めた。だが社會形態論にゆきつまつた彼は、コントに書を送り「アダム・スミスの著述のやうな經濟學に關する著作」を計

畫してゐると書き送り「豫備的暫定的な役割を忘れなければ經濟學は危険なものではなくなり、大いに有用なものでありませう。」とのコントの答に力を得て、經濟學の著述にかかつた。しかしながら暫定的豫備的なる言葉の一致の裏面に、コントの如く社會を有機體と見るか、ミルの如く合成體と見るか、に由來する解釋の相違が見られる。コントには諸科學をその對象の單純性及び抽象性を標準にして數學・天文學・物理學・化學・生物學・社會學といふ順序に排列する「諸科學の體統」なる原理があり、これらは抽象的なものから順を追つて實證化の過程をふむのである。現在に於ては生物學までが實證化されてゐる。

社會學はコントの社會學によつて實證化されるべきであり、形而上學的社會科學の最終の段階である經濟學は、恰もコントの偉業を成就せしめる恰好の條件であつた。コントの謂ふ暫定的豫備的とはかかる意味であつた。ところがこれに對してミルは經濟學の妥當性の前提となる私有財産と自由競争との二つの條件が略々實現されてゐるのは、イギリスとアメリカ位である。しかもサンジモン派の社會主義思想に接して私有財産と自由競争を究極の社會形態と考へられなくなり、あらゆる現存諸制度や社會組織をば「單なる暫定事項」と見做すやうになつたのである。従つて現在制度の上に立つ經濟學も單なる暫定事項と見るわけである。尙アンシュレー版編者序文にも、同様の問題が、ミルのリカード的出發點と原理との差が、コールド・ヂョント及

びテラー夫人の影響をめぐつて展開され、コントの影響に關しては、社會形態論に行きつまつたミルが社會連帶觀とのつながりを直接に原理の中に試みたものとされ、其他の點と共に幾分變化面が強調されてゐると比較すべきであらう。

第二節「生産と分配」第三節「自由競争と慣習」は夫々原理の紹介であり次いで「動學と靜學」に於ては、上述の生産分配論が靜學たるに反し、原理の動學的部分即ち「社會の進歩が生産及び分配に及ぼす影響」を概括し、ミルの動學はリカードが別に動學という概念を用ひずして展開した學說と同巧異曲であるとし、地代・賃銀・利潤が相互の關係から如何なる相對的價値を持つかが問題とされる所はいはば「函數概念」的な取扱ひにあつては、種々なる基本的條件の相對的變化のうちからその相互關係を明らかにしようとする他はなく、かかる意味に於ては、動學と靜學との區別は殆ど無意味であると述べ、尤もミルはかかる函數概念論の境地を脱して經濟社會の歴史的發展についても何等かの究明をなさんとする意圖が全くなかつた譯ではないとして、利潤の最低限に關する考察を例示し、かかる觀點が「私有財産制の検討」及び「勞働階級の將來」に於て一層明らかになることを注意する。第五節「自由主義と社會主義」にあつては、經濟學原理中の財産制度の考察及び勞働階級の將來に關する紹介がある。

經濟學原理發刊以後については「晩年のミル」に於てテラー

夫人との結婚、東印度會社との關係・自由論・功利主義・代議政體論・ハミルトン哲學等の出版、選舉出馬について簡單に述べられてゐる。

以上が同書のアラマシであり、ミルの生涯及び思想について忠實な輪廓ではあるが、敘述に中心のないことによる散漫さが見られる。所謂「問題史的立場」及び「個性」からの取扱ひが不明確に終つてゐる。而してミルの死後今日までの時間がプラントに終つてゐると思われる。更には問題史的立場からのミルの意義が「經濟學と社會學との交流という思想上の問題を中心として」盡きるものであるかどうかが疑問視されるのである。それが「現代經濟學叢書」中の一書なるが故とするならば、最初の傳記的な部分は殆ど無意味となるであらう。經濟學說を扱ふに當つても、時代を殆ど同じくするマルキシズム・歴史派・ドイツ國家社會主義等の成立への視野の擴大により、理論成立の地盤へと探究を進めてほしかつたと思ふ。

ミルの體系的な把握は困難といわれるが、彼の方法意識・現代の問題性等による把握は不可能でないと思ふ。先づかかる小冊子にあつては傳記的な構成よりも思想を中心として取り上げるべきではなからうか。彼の行動は彼の思想の表現であるか、或は彼の思想に結晶されてゐるかである。いはば「人體の構造を知ることは猿のそれを知ることの鍵である」という面が考へ

られるのである。ミルの中心のとり方として考へられるものをあげれば

- 1、教育思想家として
- 2、十八・十九世紀の思想のキイ・ポイントとして
- 3、経済學說を中心として
- 4、實踐哲學たる功利主義自由論を中心
- 5、經驗哲學を中心として直觀派との對比に於て等である。

以下逐次此等の觀點を簡單に述べ、最後に第五節の觀點からやや立入つてミルに關する意見をのべよう。さて先づ彼の教育重視は聯想心理學說に基き、自傳・自由論・功利主義・婦人の服従・社會主義論等に顯著である。これについては鹽尻公明氏の近刊「教育思想家としてのミル」が期待される。2に類するものには河合榮次郎氏が社會思想家評傳等に扱つて居られるが、グリーンへの橋渡しとしての面が強すぎる。鹽尻氏がベンサム論・コルリツヂ論を焦點として扱つて居られるのも注目値すると思はれる。さて功利主義と自由論とはミルの生涯を買いたテーマであり、ベンサム流の功利主義の矛盾を以て體験し、その修正により晩年の功利論に至り、單なる自由放任にあらざる最大幸福の裏付を持つ人格主義的自由論と相俟つて、社會主義・代議政體論・婦人の服従等を貫いた原則である(註)。

だが私が最も包括的に考へるのは經驗哲學によるものであ

「ミル」の「ミル」

る。彼の「多面性」には方法意識の一貫が見られ、社會科學の方法論も功利主義も又その上に採られるのである。馬場氏はこれを評して「超越的な全體の立場から出發して部分を位置づけるのではなく、内在的に部分の集積によつて全體の姿を捉へようと努めた」と言つて居られるが、正に此の内在的に部分の集積によつて全體の姿を捉へようとする態度の一貫の内に、方法意識の一貫性を認め、そこに中心を置くべきであつたと思ふのである。馬場氏の述べて居られる懷疑的態度も又此の方法意識の實踐であつて、このことは人間の判斷の絶対無過誤を期し得ないことから説き起して、社會進歩の觀點から言論思想の自由を説く自由論中著名の一節にうかがはれると思ふのである。單に自分はかく信ずるといふことを以て最後の理由とすることなく、あくまで客觀的な標準を求める謙虛な態度として捉へるべきである。恐らく此の觀點なき爲、ミルは單に抱擁性のある思想家としてコント、コルリツヂ、サン・シモン等を攝取した面に於て捉へられ、反面彼が如何に急進派として「停滯の道德」と戦ひ社會の矛盾解明に努めたかを生々として捉へなかつたのである。(例えば「ヒューエル博士の道德哲學論」「婦人の服従」参照。又單に地代公有説を稱へたのみならず倍地改良協會を組織して自ら會頭として反對運動を行つてゐる。)

ミルの論理學の基礎は、聯想心理學に基づく證據を要求する歸納の論理であり、その根本的命題は普遍的因果の法則即ち

「すべての生起する現象はそれに先行する現象を有する。」との命題であり、ミルへの反批判は結局此處を超えなければならぬ。社會科學方法論も亦人事現象も必ず先行現象を有し、社會現象も結局之等現象間の關係の複合であるとの觀念に基づいて居りその間に根本的な差異を認めないのである。

河合榮次郎氏はミルを評して言はれる。ミルは自然主義を採るに當り哲學の正否を社會改革に役立つか否かに標準を置いたのであり、此の點眞理の基準を實踐に求めた點に於てマルクスと共通であると（社界思想家評傳一一四頁）。成程經驗主義をミルが「強調」するのは「心の外にある眞理が觀察や經驗とは獨立に意識によつて知り得られると言ふ考へは現代に於て偽りの教理や悪しき制度の大なる知的授護なりと信ずる」故であるが、觀察や經驗に基づかない議論は眞偽を論じ得ない形而上學的突論であり、あらゆる議論に、それに従ふことによりその信念は事實上適合し得るやうな Evidence を求めるのが根本となつてゐると思はれる（論理學體系三卷二一章）。

河合氏は更に感覺論的認識論では一般的概念はあり得ず、科學には必然性があり得ず蓋然性があるのみとされ、又道徳的哲學に於て自己の人格の生長を認めたことも妥當であるに拘らず、依然として功利主義に執着してゐるとして、自然主義はミルに依つて弔鐘を敲かれたとされる（同書一三五—一七頁）然しながら蓋然性にも實録から明日太陽が登ることまで種々の段階

があり、蓋然性若くは近似性も科學と言う名稱はとにかく人間探究の重要な課題でなかるうか。更にミルの場合には蓋然性はその依存する條件を辿ることによつて普遍的因果の法則に發展開されてゐるのではなからうか。尙良心とか人格とかを認めるか否かは、功利主義（河合氏によれば自然主義の道徳）の破綻ではなく、如何なる時に良心に従つたと言へるかを外的な標準に求め、それによつて議論を可能ならしめるのが根本である。その故にミルは、ベンサム的一面を修正しつつも、適當な修正を行ふ限り根本に於てはベンサムと同意見であると述べたのである（「ベンサム論」）道徳の問題に外的な標準を求め、その標準として行爲の結果が及ぶ人々の幸福を持ち出すのが、功利主義の主な主張である。

最後に社會主義に「べつを加へよう。ミルは「婦人の服従」に於て社會關係は力の支配から正義の支配に移つたと述べてゐるが、その正義の支配とは分配問題に關しては、人類の智的道徳の水準を考慮に入れるならば、私有財産と自由競争に基づくものと考へた。而して私有財産制度の根本に生産物に對する生産に貢獻せる者の權利を見、その觀點よりして現存社會形態が唯一の私有財産形態に非ずとして、現存社會の缺陷と見做される貧困と墮落を是正するものとして、出生の偶然による財産取得を排し社會の進歩に基づく地代の地主に歸するを難するのである。かくして現存財産制度の根本にあるとミルが見做す所の

「生産への貢献に應ずる分配」の観点から現存制度の欠陥を修正し、かくして得られた理想的私有財産社会と、共産社会とを最大幸福と自由の見地から比較検討するのである。(ミルは社会主義社会との差異を共産主義社会との差異をを私利を以て労働を勵ます方法を残存するや否やに置いた。)

こゝに於て「生産への貢献」の意味が疑問視され、就中利潤の歸趨が問題となり、又ミルが代議政體論に於て取扱ふ政治制度が如何なる範圍まで選擇の問題であるかについての意見が検討されるべきであらう。しかしながら最大多数の最大幸福の見地からの問題の取りあげ方は、個人の態度の決定の領域に於て捨て難いものがあると思はれる。

以上方法意識を中心として若干の私見を述べたが、「論理學體系」と「自由論」とは最も永く残るであらうとはミルが自ら述べる所である。私はこれに「功利主義」をも附け加へたい。彼の結論の歴史的社會的な制約はもとより超えらるべきではあるが、彼の方法には超越的に非ずして内在的に超えらるべき面があると思ふ。凡そ思想の生命は、その人生や認識に對する態度が超越的には超えられない所にあるのではなからうか。その故にキリスト教は二千年の生命を保ち、デカルトは近世哲學の父と呼ばれるのではなからうか。

一三二頁の註——即ち「社會主義論」に於ては社會改造の目

ジョン・S・ミル

的は「人類を教養して、個人的最大の自由と、現存の財産制度の意圖せざる勞働の成果の公平分配とを兼備せる社會態に適當ならしむるにあり。」とし「婦人の服従」に於ては婦人が男性の意志への從屬の生活から合理的自由の生活に移ることによる個人的幸福をのべると共に社會的利益として人類の思考實踐力の増大について考察する。「代議政體論」に於ては良き政府形體の判斷の基準として

1 如何に社會の一般的精神的進歩を促進するか(——自由の觀點)

2 如何に完全に既存の道德的・知的・行動的な長所を組織して公の事項に關して最大の効果を發揮しうることとするか(——功利の見地)

の二點を擧げて論ずるのである。

### 本號執筆者紹介

岸本誠二郎	京都大學教授
青山秀夫	京都大學教授
出口勇藏	京都大學教授
岩根達雄	京都大學特別研究生
行澤健三	京都大學特別研究生
木下和夫	京都大學經濟學部講師